



「赤物」から製漆業を経て、現在も仏壇製造・販売業を営む大場商店（昭和初期撮影）

(1) 「町人」工芸としてはじまる

(1) 「町人」工芸としてはじまる

高岡漆器の歴史は慶長14年(1609)加賀藩2代藩主・前田利長の高岡開町と同時に始まりました。利長は各地から商人や職人を集め、城下の発展を図ったのです。

新川郡大場村（富山市大場）から高岡指物屋町（のち檜物屋町）に移った庄左衛門は、簞笥や長持などの指物を作りました。この指物の多くには朱漆が塗られ「赤物」と呼ばれました。庄左衛門の元には職人が集まり、高岡漆器は「町人」工芸として始まりました。

「赤物」は高岡周辺だけでなく、加賀藩内（富山・石川県）、越後（新潟県）や、北海道までも広まったといいます。

(2) 高岡「工芸」漆器の名工たち

元禄期(1688～1704)の塗師屋八兵衛や、明和期(1764～72)に活躍した砺波屋伊右衛門丹楓（辻丹甫）は、擬堆黒（朱）などの中国風の漆彫りの技術をもたらし、高岡工芸漆器の開祖といわれています。

さらに化政期(1804～30)には砺波屋桃造が、天保・弘化期(1830～48)には板屋小右衛門が活躍し、存星や彫刻塗に優れ、現在でも高岡御車山にその技をみることができます。

また、幕末から明治期にかけて、石井勇助が勇助塗を、三村卯右衛門が錆絵を、立野太平治は青貝塗の技法をそれぞれ創出・確立して、漆器産地としての基盤が築かれました。



擬堆黒総盆（伝辻丹甫作）当館蔵



高岡彫刻塗「二匹鯛」 当館蔵

(3) 高岡漆器「産業」の発展

明治27年(1894)に設立された富山県工芸学校（現県立高岡工芸高校）では、校長の納富介次郎（デザイナー）と教頭の村上九郎作（彫刻）により彫刻塗「鯛盆」が創作され、漆器業界に大きな影響を与えました。

大正から昭和初期には、組合が設立され業界をあげて生産と販売の近代化が図されました。また職人たちが競って商工展へ出品し、技術の向上を目指し、多彩な技法の産地として認められていました。

戦後は漆の輸入が途絶えて混乱しましたが、分業化、共同事業への転換などによって順調に発展し、昭和50年には国から「伝統的工芸品」に指定されるに至りました。

高岡漆器の歴史年表

年 代	主 な 出 来 事	
慶長 14 年 (1609)	前田利長による高岡開町。大場庄左衛門が高岡檜物屋町に移住。家具を製造して、これに朱漆を塗った「赤物塗」が始まる。簞笥、長持、針箱等を職人が製作・直売。	
元和元年 (1615)	「一国一城令」により高岡城が廃城。この頃高岡にて仏壇の製造が始まる。	
元禄期 (1688~1704)	この頃、蒔絵の名工ぬしや八兵衛なる者がいた。椀、膳、盆などが作られ始める。	
明和期 (1764~72)	砺波屋丹楓(辻丹甫)が京都で修行、帰郷し擬堆黒・朱、存星など中国の技法を伝来。「丹甫塗」が始まる。	明和～文政期にかけて名工が活躍。
文化期 (1804~18)	この頃に丹甫塗を受け継ぐ砺波屋桃造(鳴鳳堂)が活躍。	盆、重箱、菓子器などを作り高岡塗の基礎を築く。
文政期 (1818~30)	板屋小右衛門が存星、木彫彩漆に妙技を振るう。	
天保 10 年 (1839)	加賀藩13代・前田斉泰が高岡にて存星刻硯屏(板屋小右衛門作)と堆黒文箱(伊勢領屋桃二作)を買上げ。	
嘉永～安政期 (1848~60)	大場屋が製漆商を始める(高岡における製漆商の始まり)。	
嘉永 3 年 (1850)	初代石井勇助が中国風の各種材料、技法を併用した「勇助塗」を確立。	
明治元年 (1868)	初代三村卯右衛門が錆絵、彩漆の研究を重ね、独自の「錆絵」技法を確立。	
明治初期	明治に入ると、茶棚・器局・卓台・飾棚が、勇助塗で盛んに作られ、針指箱・櫛箱・長持・膳等嫁入り道具や、杉材を使用して火鉢・床卓等も作られた。	
明治 6 年 (1873)	ウィーン万博に初代石井勇助が出品。	
明治 10 年 (1877)	第1回内国勧業博覧会にて初代石井勇助が妙技賞を受賞。石井勇助、三村松斎らが初めて先進地を視察。	
明治 15 年 (1882)	立野太平治が青貝細工を始める。	
明治 27 年 (1894)	富山県工芸学校設立。初代校長・納富介次郎、彫刻科教諭・村上九郎作。	
明治 30 年 (1897)	村上九郎作が鰯盆、手ぐり盆を創始し特産彫刻となる。	
明治 42 年 (1909)	大坪商会設立、主に彫刻漆器を輸出(大正8年には高岡漆器商会と改称)。皇太子(のちの大正天皇)北陸行啓を機に高岡物産陳列所設立。	
明治 43 年 (1910)	金丸次郎平が挽き物木地で火鉢を製造。	
明治 45 年 (1912)	高岡漆器購買販売組合設立(初代組合長・3代石井勇助)。	
明治末～大正期	朴木村の舟木喜太郎が手ぐり鰯盆を製作。	
大正 2 年 (1913)	二塚安太郎が東京市場に高岡漆器を紹介。 富山県工業試験場開設。試験場にて三角ノミの研究が行われる。	大正初期、高岡独特のデザインの「むきみかん火鉢」が人気を博す。
大正 4 年 (1915)	高岡漆器同業組合設立。高岡唐漆器部会誕生。	
大正 8 年 (1919)	輸出漆器が盛んに。生駒弘が高岡市立商工実修学校漆工部で指導。同校第1回卒業生が漆芸みどり会を発足。	
大正 10 年 (1921)	高岡市工芸図案講習会始まる(昭和4年まで毎年1ヶ月、講師は山崎覚太郎等)。漆芸みどり会第1回展開催。	
大正 13 年 (1924)	布目弥逸が螺鈿の最高峰技術「正倉院螺鈿」の修行のため昭和3年まで奈良の吉田辰之助に師事。木村天紅が朝鮮螺鈿の技術及び工人7人を高岡坂下町に移入し「朝鮮之螺鈿社」を開く。	大正末期から昭和にかけてビール盆・電燈台・帽子台・菓子器などが作られ輸出も盛んに行われた。
昭和 元年 (1926)	国井喜太郎が富山県工芸学校校長に就任。	
昭和 3 年 (1928)	同業組合で意匠新案登録制度1号を登録(石瀬松次郎)。彫刻技法にトントン彫が始まる。錆絵の屠蘇器、曙塗の会席膳煙草盆の全盛期。	
昭和 8 年 (1933)	恵比寿、大黒など彫刻丸盆の本格的量産が始ま(高木作次郎)。高岡で鎌倉彫の彫刻塗が行われるようになる。	
昭和 10 年 (1935)	この頃の庄川挽物はほとんどが高岡漆器の木地生産で占められていた。	
昭和 12 年 (1937)	朝鮮螺鈿工人が帰郷。満洲事変により漆の輸入減少。この頃煎竈箱の生産盛んに行われる。	
昭和 13 年 (1938)	高岡漆器工業組合設立。	
昭和 14 年 (1939)	漆の配給制実施。	
昭和 15 年 (1940)	曲物火鉢の生産始まる。	
昭和 17 年 (1942)	富山県漆器統制組合設立。	
昭和 21 年 (1946)	富山県漆器統制組合を富山県漆器事業協同組合に改称。手提げ袋の持ち手(木口)を生産。	
昭和 23 年 (1948)	カシュー塗料講習会実施(県工業試験場)。ベーカーライト素地漆器を輸出(高木作次郎)。煎竈箱の半製品を進駐軍向けに宝石箱・煙草入れに転換して生産。物資不足で長手盆などの実用品が中心になる。	
昭和 26 年 (1951)	漆の入手が困難になる。高岡塗装技術指導所(所長・山崎立山)開設。	
昭和 29 年 (1954)	この年から昭和33年頃、大手電機メーカーの電熱火鉢が生産の5割を超える。	
昭和 31 年 (1956)	プラスチック素地材による盆菓子器・ベリーセット・回転オードブル皿などが盛んになる。	
昭和 33 年 (1958)	石油ストーブや電気炬燵等の暖房革命で、塗火鉢の生産が激減。文庫・硯箱・パネル等の室内装飾品が出始める。	
昭和 39 年 (1964)	彼谷芳水が富山県指定無形文化財(勇助塗)に認定。	
昭和 40 年 (1965)	高瀬想風が富山県指定無形文化財(錆絵)に認定。	
昭和 44 年 (1969)	高岡市デザイン指導所開設。	
昭和 45 年 (1970)	協同組合高岡漆器センター共同工場完成(理事長・黒田長太郎)	
昭和 48 年 (1973)	商工ビル内に高岡市商工奨励館開設。あかね盆の開発。	
昭和 50 年 (1975)	高岡漆器(勇助塗・彫刻塗・青貝塗)が通商産業大臣指定伝統的工芸品となる。伝統工芸高岡漆器協同組合設立。	
昭和 58 年 (1983)	高岡市工芸デザイン指導所開設。新商品開発事業(金胎漆器/ふくろう・孔雀)。	
昭和 61 年 (1986)	富山県工業技術センター、高岡市二上に開設。第1回工芸都市高岡クラフトコンペ開催(以降毎年開催)。	
平成 6 年 (1994)	高岡伝統工芸技術伝承事業実施(乾漆)。	